

序章

僕はなぜジャーナリズムを疾走するのか

田原総一郎です。僕は二〇二四年四月一五日に九〇歳になった。僕の年まわりは、世の中一般で言えば、ここまで生きてきたことに感謝して、最晩年の余生を静かに送るべき時間ということになるのかもしれない。

でも僕は、まったくそういう気持ちになれない。それなりの仕事をしてきたという自負がないわけではないが、どうしても一丁上がりとは行けない。いまま朝から晩まで永田町や霞が関かすみをせわしく歩き回り、多くの人たちと会い、議論し、論争し、発信する毎日を送っている。

田原流ジャーナリズムの濃密な日々

たとえば、二〇二三年四月の第二週、第三週はこんなスケジュールだった。

四月三日（月）朝八時起床。一〇時四〇分、新宿K's cinemaで小泉純一郎vs田原対談映画『放送不可能。』上映記念トークイベントを古賀茂明氏と。一五時、毎日新聞出版で編集者と打ち合わせ。一七時半、齋藤健法相けんと議員会館で面談。二四時就寝。

四日(火)朝八時起床。一〇時四〇分、新宿K's cinemaで『放送不可能。』上映記念トークイベントの二日目を下村満子氏と。一七時、BS朝日番組打ち合わせ。二三時半就寝。

五日(水)朝八時起床。一四時、伊勢崎賢治氏らとウクライナ戦争停戦を求める会見。一五時、「朝まで生テレビ！」(テレビ朝日、「朝生」)打ち合わせ。夕食後、『週刊朝日』原稿執筆。二四時就寝。

六日(木)朝八時起床。一一時、「田原カフェ」の次回ゲスト濱井正吾氏と打ち合わせ。一三時半、官邸で総理秘書官の嶋田隆氏と面談。一六時、自民党本部で二階俊博氏と面談。一七時、BS朝日番組打ち合わせ。一八時半、小泉純一郎氏、中川秀直氏と会食。二四時就寝。

七日(金)朝八時起床。一四時、『潮』で細谷雄一氏と対談。一六時、『サンデー毎日』で倉重篤郎氏とともに田岡俊次氏と鼎談。二四時就寝。

八日(土)朝八時起床。一六時、テレ朝アーク放送センター入り。一七時、BS朝日「激論!クロスファイア」収録。二三時半就寝。

九日(日)朝八時半起床。一四時、元『話の特集』編集長・矢崎泰久氏を偲ぶ会しのに出席。夕食後、『読書人』原稿執筆。二四時就寝。

一〇日(月)朝八時起床。一一時、番組スポンサーのタクミ商事に挨拶。一四時、日経BP

インタビュー。一六時、『現代ビジネス』で島田裕巳ひろみ氏と対談。二四時就寝。

一日（火）朝八時起床。一〇時半、僧侶池口恵観えかん氏と面談。一一時半、順天堂医院で定期検診。一五時、文藝春秋で打ち合わせ。一七時、BS朝日打ち合わせ。一八時半、喫茶「ぷらんたん」で「田原カフェ」、ゲスト濱井正吾氏。二四時就寝。

二日（水）朝八時起床。一五時、「朝まで生テレビ！」打ち合わせ。夕食後、『週刊朝日』原稿執筆。二四時就寝。

三日（木）朝八時起床。一一時四五分、東京都副知事宮坂学まなぶ氏、スローニュース代表瀬尾傑まさひろ氏とランチ。一四時、下重暁子しもしゆうあきこ氏との対談を文藝春秋で。一七時、BS朝日打ち合わせ。二三時半就寝。

四日（金）朝八時起床。一一時半、小林クリニックで定期検診。一四時、『リベラルタイム』インタビュー。一六時、朝日新聞社で打ち合わせ。一八時、デート。二四時半就寝。

五日（土）朝八時起床。一四時、テレ朝アーク放送センター入り、一五時、BS朝日「激論！クロスファイア」収録。一八時、八九歳誕生会。二四時半就寝。

六日（日）朝八時起床。一五時、早稲田大隈塾OB一〇〇人と誕生会。二四時就寝。

死の瞬間まで時代の変化と向き合いたい

これだけ動き回っても、僕はまだまだやり足りない。知りたいこと、訊きたいこと、勉強したいこと、表現したいこと、伝えたいことといっぱいなのだ。この気持ちをわかってもらうには、僕のジャーナリストとしての軌跡をたどる必要があると思う。

僕は本当は作家になりたかった。大学時代には、一生懸命小説を書いてはさまざま賞に応募したが、ものにならなかった。仲間からは、お前は才能がないから早くやめた方が得策だと言われた。それでも小説を書くことを諦めきれず、やめられなかったのだが、さすがに同世代の石原慎太郎と大江健三郎という天才が彗星のごとく登場し、のちに芥川賞を取る彼らの作品を読むに及んで、これはとてもかなわないと踏んぎりがついた。それで僕は、文学の道を諦めることができた。

それからはジャーナリストを目指し、その道だけを七〇年近く走り続けてきた。テレビディレクターとして数多あまたのドキュメンタリーを作り、書き手として二〇〇冊以上の本を書き、「朝まで生テレビー」や「サンデープロジェクト」（テレビ朝日、「サンプロ」）の司会、コーディネーターとして永田町を動かすニュースを発信し続け、この二〇年は歴代首相に対して、ジャーナリストとして感じたことを衷心から意見具申する役割を演じてきた。

世の基準からすれば、特にジャーナリストの世界で言えば、よくぞここまでおやりになりましたね、成功されましたね、ここまでされたのなら後は悠々自適に暮らしてはいかがですか、というところかもしれない。実際に僕に向かつてそういうことを言ってくれる人もいる。

もちろん、そうじゃない見方があることも承知している。田原はいい年していつまでテレビで偉そうにしているんだとか、田原はもうボケた、老害以外の何物でもない、そろそろ次世代に譲って、立つ鳥跡を濁さずとすべきではないか、といった厳しい声も耳に入ってくる。

ただ、僕はいずれの人たちに対しても、「ノー」と言わせてもらいたい。

僕にとってジャーナリズムとは、終わりのない仕事なのだ。時代とともに歩み、時代の変化を敏感に感じ取り、それがどこから来るものなのか、どういう方向に変化していくのかを、真摯に、執拗に、追い続けることだ。時代の変化は途切れることがない。そうである限り、ジャーナリストは死の瞬間までそれに付き合っていくべきだと思っている。老いて衰えた僕でないと見えない時代の姿というものもあるはずなのだ。

僕にはジャーナリストとして守るべき三つの原則、追求すべき理想がある。

一つは、日本に二度と戦争を起こさせないこと。

二つは、言論の自由を守り抜くこと。

三つは、野党をもっと強くして日本の民主主義を強靱きょうじんにすること。

社会を映す「鏡」を常に作り変える

いまウクライナ戦争があり、ガザ危機があり、米中間の対立激化から台湾有事が懸念されている。「新しい戦前」とも呼ばれるこの時代のこの国で、僕ら戦争の惨劇を知るジャーナリストが声を上げなくてどうするんだという気持ちがある。また、安倍晋三政権時代の放送法四条「政治的公平」の解釈変更、つまり「反政府的な番組は取り締まる」という方針が力を持ちつつある現状を見ても、言論に対するジャーナリズムの責任はますます重くなっている。

民主主義というものが、政権交代によって活性化されるものであるなら、いまの野党の弱体化は、政治自体を損ねるような、ある意味での危機的状況を招来している。そういう日本の現在と、ジャーナリストとしての原点からして、いま僕は「はい、引退します」と言うような状況には、まったくくない。

田原総一郎というジャーナリストは、時代を映す一つの「鏡」だと思っている。時代のある面を切り取り、そこから社会の全体像を俯瞰ふかんして映し出す。それによって、いまの混迷の核心、事の本質が一体どこにあるのかを見極め、徹底的に斬り込んでいく。

僕の場合は、これまで人々がオーブンにすることを避けてきた、いわゆるタブーとされる領域に、その鏡を積極的に持ち込んできたつもりだ。

東京12チャンネル（現在のテレビ東京）時代にディレクターとして作った「ドキュメンタリー青春」がそうだったし、書き手として数々の弾圧を押し返しながら『原子力戦争』（筑摩書房、一九七六年）や『電通』（朝日新聞社、一九八一年）を書いた時もそうだった。

もう三七年間も続けている「朝生」は、時代の抱える問題について、どういう見方、意見、解決策があるのか、それを多彩な人たちの論争によって映し出そうとする「鏡」だったし、政局をも動かすことになった「サンデープロジェクト」は、永田町の生々しい権力闘争をスタジオの「鏡」に映し出すことによって、政治のあるがままの姿、その深層のありようをお茶の間に届けようとする試みだった。

僕は、ジャーナリストとして、時代によってその「鏡」の形や角度を作り変えてきた。ある時は映像に徹底的にこだわった。ある時は活字がどこまで「鏡」の役割を果たせるか、さまざまなトライアンドエラーを繰り返してきた。そしてこの四半世紀は、テレビと活字をツイン・ターボとした立体的な「鏡」によって、世の中の陰影を活写し続けてきたつもりだ。

さらには、ITの進歩でSNS、YouTubeなどのメディアが出てきても、僕はそれらとシ

ンクロして自分の「鏡」を広げてきた。ChatGPTの画期的な意義と可能性については、人工知能研究の最先端を行く東京大学の松尾豊教授にさまざまな示唆を受けたりもした。

メディアの最先端を走る俊英たちに教えを乞うて、どうすれば時代状況をより広範に捉える「鏡」となれるか、試行してきたのだ。

エネルギーの源泉は「好奇心」

「2ちゃんねる」の元管理人・西村博之とも対談したし、いまやロケット開発にまで手を出しているホリエモンこと堀江貴文には、証券取引法違反で収監されていた刑務所にまで会いに行った。「あいちトリエンナーレ」で芸術監督を務めて大炎上した津田大介とも「なぜ日本人は空気を読んで失敗するのか」というテーマで大激論した。

自分でもツイッター（現在のX）での発信を始めたし、YouTubeで「田原総一朗チャンネル」も起ち上げ、時事問題からプライベートな生活の姿まで、発信している。

意外にも、僕が朝、目玉焼きを作っている映像にアクセス数が多かった。もちろん、手伝ってくれる人がいるからできるのだが、生のままの僕自身を「鏡」の中に映し込むことによって、ジャーナリストとしての裸の実像も見てもらえるようになった。新しいメディアの恩恵をもら

っている感じがする。

時代とともに、あるいはメディアの進化とともに、時代を映す田原総一朗の「鏡」も変化し進化してきた。時代を追いかけ、何とか追いつこうとしてきた。僕はその自負だけはある。それを最後まで進化させつつ時代を切り取っていききたい。七〇年近くやってきたその仕事を最後まで貫徹したい。

幸いなことにジャーナリズムのエネルギーの源泉である僕の「好奇心」は、まだまだ泉のごとく湧いてくる。若い人からも不思議がられるのだが、これだけは衰えを知らない。

新しいものが出てくると、ふつつつと興味が湧いてくる。なぜ、それが生まれたのか、今後どうなるのか、古いものとどんな葛藤が起きるのか、といった疑問が次々に出てくる。どうしても関係者に会って直接^{ただ}質したくなる。いまの僕には、多くの方々が直接会ってくれ、僕は話を聞ける。そのチャンスがジャーナリストとして逃す手はない。

僕は、サムエル・ウルマンの有名な詩「青春」を思い出すことがある。

青春とは人生のある期間ではなく、

心の持ちかたを言う。

薔薇^{バラ}の面差し、紅の唇、しなやかな手足ではなく、

たくましい意志、ゆたかな想像力、炎^もえる情熱をさす。

(中略)

六〇歳であろうと一六歳であろうと人の胸には、

驚異に魅^ひかれる心、おさな児^このような未知への探究心、

人生への興味の歓喜がある。

(中略)

二〇歳であろうと人は老いる。

頭^{こゝろ}を高く上げ希望の波をとらえる限り、

八〇歳であろうと人は青春にして已^やむ。

(サムエル・ウルマン著、作山宗久訳『青春とは、心の若さである。』ティビーエス・ブリタニカ、一九八九年)

九〇歳の一線ジャーナリストである僕の心境をあますところなく代弁してくれているような気がしてくる。

確かに、いまの僕にはかつてのような冴えがなくなっているかもしれない。滑舌が悪くなっていることも認める。話も繰り返しが多くなったとよく指摘される。

それでも僕は日々現場に出て、新しい人と会い、新しい話を聞きたい。出会いのなかで僕も刺激を受け、さらに新たな思考ができるようになるのだ。老害、老醜と言われようとも、走って走って、時代を走り抜きたい。

ここまで七〇年近く疾走してきて、ジャーナリストの世界が、いかに深く広がりのある世界なのか、僕は僕なりに体で会得していると思う。そこに、いまを映したい。

さらに豊かに生き直すために

正直言って、あと何年生きられるかわからない。過去に病気もしているし、それほど頑健な体でもない。ただ僕は、最後の一呼吸をする時に、ジャーナリストとしてやってきたことを後悔したくない。昨日より今日の方がいい仕事できた、明日はもっと面白いことに会おうかもしれないと、最後まで信じて死にたい。

『全身ジャーナリスト』という本書のタイトルはいささか面はゆい。果たしてそこまでの仕事をなし得たのだろうか、と。ただ、僕の人生と、いま現在の生き方を振り返ると、この仕事以

外のことにはほとんど興味を持たず、何もしてこなかったという意味では、的確なタイトルなのかもしれない。

僕の家にあるのは、仕事に関わる本や資料の山だけだ。酒も飲まず、ギャンブルも女遊びも一切しない。すべてをジャーナリズムという仕事に投入してきたことだけは事実だ。

「朝生」の放送中に出演したまま死にたいと言ったことがあるが、それは掛け値なしの本音だ。なんやかんや議論が弾んで、盛り上がっている最中、いつの間にか田原が静かになっていた、よく見たら呼吸していなかった——最後まで一線での仕事を続けることを目指したジャーナリストとして、こんな素晴らしい死に方はないと思っている。

僕はこれまでも自伝的な本や、人生についての対談集などを出してきた。なかでも『塀の上を走れ 田原総一郎自伝』（講談社、二〇二二年）は、僕が全力で書き下ろしたものだ。

あれから十余年。どうしてもまた自伝的なメッセージを書き残したくなかった。現場を走り抜く僕のこの取材の日々が、未来永劫えいごう続くわけではない。

この一〇年で僕が新たに経験し考えたこと、僕が日本の戦後とほぼ並行して七〇年近くジャーナリスト活動をした結果培ってきたこと、急速に姿を変えつつある日本と世界に僕が感じること……それらをきちんと形にして残すことが次世代への使命ではないかと思えてきた。

先ほどウクライナ戦争、ガザ危機、台湾有事に触れたが、国内に目を転じて、裏金問題や数々の不祥事が重なって自民党は揺れに揺れ、国民の政治不信は深まるばかりだ。そして、このような危機こそ、ジャーナリズムの出番だと僕は考えている。

この本では、これまでとは少しばかり色合いを変え、僕がジャーナリストとしてどう生きたかを主軸にして、僕の人生を編み直してみたいと思う。これまで語れなかったことにも、あえて触れるつもりだ。僕の最後のオーラルヒストリーと言っていいだろう。

構成は、毎日新聞客員編集委員の倉重篤郎に頼んだ。倉重には、彼が連載している『サンデー毎日』のインタビュー論考に何度も登場させてもらっている。彼とともに何人もの時代の重要人物に取材をした。ここ数年の付き合いだが、最晩年の僕の大事な仕事仲間であり、僕のことを深く理解してくれていると思っている。

各章の終わりには、僕と付き合いのある人たちからのコメントを、倉重がまとめてくれている。僕の言い分だけでは終わらせない立体構造になっているのだ。本書によって、僕は僕の人を生を、さらに豊かに生き直そうと思っている。読者の皆さんに、時代を見抜くヒントや、いまを生きるうえで刺激を与えられたなら、こんなに嬉しいことではない。